「地理B」指導方法の考察

奥　平　　理*

I．はしがき

今回の学習指導要領の改訂で，社会科は「地理歴史科」と「公民科」に分かれることになった。しかも従来の「地理」は「地理A」と「地理B」に分かれ，それぞれ異なる趣旨を持つ構成になった。

地理A・B共に「国際社会に生きる日本人としての自覚と資質を養う」点が強調されており（渋澤，1990），これまでより国際的な視点を重視した教育内容を構成していくことが必要であろう。また，人文・自然現象を独自の存在として把握するのではなく，両者の因果関係を的確に把握した上で，空間的相互作用を明らかにすることが地理教育に必要になったといえる。特に，地理Bでは，従来の系統地理的視点と地誌的な視点の両方からのアプローチが必要（渋澤，1990）となるため，これらの問題点の考察は極めて重要な意味をもつと考えられる。

本稿では，今後「地理B」において重要な指導内容になると考えられる「国際理解」教育と「環境」教育の2点について，指導事例作成の過程から前述の問題点を解明，考察することを目的とする。

II．「国際理解」教育の指導事例

1．趣旨と教材化の視点

新学習指導要領においては，「国際化の進展への対応」が声高に叫ばれているなかで，地理学習を通じての教育が強く要求されているといえる。現実に働き続けている国際社会を空間的に「地図」という方法を用いて解明できるのは地理以外には考えられないからである。

この「国際化の進展への対応」は，具体的には「国際理解教育」という形で実現できる。しかし，「国際理解」にはあまりにも多くの内容が含まれており，この内容をすべて指導することはできない。もし指導すればそれは羅列的な授業となり，生徒に嫌悪感を植え付けることにもつながると考えられる。従って，生徒を引き付け，興味付けのできるテーマをいかに選択するかが鍵となるであろう。

わが国はこれまで，外国文化を「外面的」に受容し続けてきたと思われる。確かに，生活のスタイルも西洋化し，外面的には諸外国のそれと大差ないものになっている。しかし，「内面的」な外国文化の受容がほとんどなかったために，現在では外面的な文化と内面的な文化の間に大きなギャップが生じてきたと思われる。例えば，見掛けは洋服をまとい，スマートに仕事をしているわれわれも，内面では「Yes／No」を付けない曖昧な思考のままの日本人である。こうしたギャップは外国の人々に不満を募らせることにもつながりかねないものであり，これからの社会を背負っていく生徒達には，少しでも世界の国々の「内面的」文化への接触の機会を多くしていかなければならないと思われる。

幸いにも地理では複数の国々の比較を通じて現在の異なる文化にふれることができる。また，現在の生徒達は文字からの知識の吸収が不得手であり，視聴覚教材を豊富に用いることのできる地理は「視覚に訴える」ことで生徒の知識吸収を助けることが可能である。また，地理Bでは「内容の取扱い」について，「1～3つ程度」といった表現で事例地域数のめやすを設定しており，知識網羅的に見るのではなく，より深い視点で主要地域の文化を追求できるようになっている点が重要であろう。

そこで，前述のように諸地域の内面的文化に焦

＊北海道函館中部高等学校

点を当て，わが国の内面的文化との比較を通じてより深く洞察させることを考えた。さらに，そのなかでも最も身近だが目にふれにくいと考えられる「生活習慣・食文化」の2点に絞って授業を構成することを試みた。文化は空間的な広がりをもって互いに影響しあっている。この空間的相互作用を生徒に理解させることが地理教育の充実に不可欠なポイントになるといえよう。

2．指導内容のねらい

前項でも述べたが，わが国に求められている姿勢は諸外国の内面的文化を理解した上で協調していく姿勢である。しかし，この内面的文化の理解は，海に囲まれ長い間に独自の文化を形成したわが国では最も困難なことである。だが，近年の情報化の進展に伴って，これまで以上にさまざまな場面で世界中の人々と接触する機会が増加しているため，より深く諸地域の内面的文化を理解する必要性が増大していると考えられる。

このようなことから，指導内容のねらいを次の4点にまとめた。

ア　文化とは何かを把握させ，世界中にはさまざまな国や人種・民族，宗教，文化が存在していることを正しく理解させる。

イ　生活習慣・食文化の例としてオーストラリア・中国を取り上げ，他国同士を比較することで最も身近な文化も国・民族によって大きく異なることを考えさせる。

ウ　わが国の生活習慣と食文化の歴史的背景を説明し，現在の生活習慣や食文化を生徒に見つめさせることで，いかに多くの部分を外国から受け入れてきたのか，そして，古くから変わらない部分も存在していることを生徒に理解させる。

エ　文化が空間的広がりをもって互いに影響しあっていることを認識し，身近な文化を理解しあうことが国際理解の出発点であることを生徒に理解させる。

3．指導内容の構成（6時間）

ア　世界の人種・民族（1時間）
- 文化とは何か
- 人種と民族の違いについて
- 世界の人種の広がり

イ　世界の宗教・言語（1時間）
- 三大宗教とその広がり
- 言語・文字とその広がり
- 人種・民族と宗教
- 人種・民族と言語

ウ　身近な地域と文化　1
－オーストラリア－（1時間）
- オーストラリアの歴史・自然と現状
- 食文化から見た生活習慣
- 慣習と生活習慣

エ　身近な地域と文化　2
－中華人民共和国－（本時）
- 中国の歴史・自然と現状
- 食文化から見た生活習慣
- 慣習と生活習慣
- 少数民族とその暮らし
- 人々の生活の変化

オ　身近な地域と文化　3
－日本－（1時間）
- わが国の生活習慣の歴史的背景
- 現在の生活習慣との比較
- 外国から取り入れた文化・習慣
- 伝統を守る文化

カ　広がる文化（1時間）
- わが国の生活習慣と他国の比較
- 国境を越えて広がる文化と生活習慣
- 身近な文化と国際交流

4．指導展開例

1).主題と本時のねらい

身近な地域と文化　2　－中華人民共和国－

隣国である中国の自然や歴史の基本的事項を理解させた上で，同じ漢字を使う人々の暮らしから，生活習慣に関する誤った認識を取り除き，中国の人々の生活習慣を正しく認識させる。また，中国は多民族の国であり，それぞれに異なった生活習慣をもつことも合わせて理解させる。

2）学習指導過程

指導内容	指導と学習活動	指導上の留意点	教材・資料
（導　入） 中国の自然・歴史と現状 （15　分）	・地図や資料をもとにして，中国の自然・歴史や現状を確認する。	・まず，中国が地球上のどこにあって，どんな自然条件にあるか，どのような歴史をもつのかを作業を通じて理解させる。さらに現在の社会のしくみについても理解させる。	・地図帳 ・白地図 ・歴史年表 ・教科書
（展　開） 食文化から見た生活習慣 慣習と生活習慣 少数民族とその暮らし （25　分）	・中国の食文化は日本と同様に米食の文化であるが，日本とは副食の調理がかなり異なっていることを確認する。 ・中国は社会主義国家であるがわが国と同様に儒教の精神が息づく国であることを確認する。 ・中国は多民族国家であり，各民族が固有の文化を守り努力をしていることを確認する。 ・中国政府も少数民族を保護する努力をしていることを確認する。	・「中国の人々は何を食べているだろうか？」 ・発問の答えを板書し，理解させる。 ・自分の体験を導入する。 ・「儒教の精神とは何だろうか？」 ・発問の答えを整理し，この精神が近代化の妨げになっていることに気付かせる。 ・わが国への影響を考えさせる。 ・作業学習を通じて理解させる。	・スライド ・資料1 ・プリント ・資料2 ・資料3 ・プリント ・スライド （中国の少数民族）
（まとめ） 人々の暮しの変化 （10　分）	・中国には固有の生活習慣があることを確認した上で，近年の近代化に伴う人々の生活の変化を考える。	・豊かになった反面，多くの問題が生じてきたことを理解させる。 ・伝統の文化を守ることの難しさ，大切さに気付かせる。	・資料4 （表・写真）

（奥平，1991より）

5．評価の観点

評価の観点は次の通りである。

ア　中国には各民族に固有の生活習慣があり，日本とは異なるものであることが理解できたか。

イ　東アジア地域に最も大きな影響を与えた中国の儒教的精神の現状と課題を理解できたか。

ウ　伝統の文化を守ることの大切さや難しさを実感できたか。

エ　授業で使用したスライドや資料，地図などの作成は適切であったか。

6．今後の課題

今回の指導事例は「内面的文化」の理解に的を絞って作成したが，より深い国際理解のためには人種・民族・宗教・言語の空間的相互作用の認識をあらかじめ生徒に与えておく必要があると考えられると考えられる。さらに，この単元ではより効果的な視聴覚教材の作成を通じて「視覚に訴える」授業展開が可能になる。今後の課題は，より視覚的な国際理解授業の展開方法であろう。

Ⅲ.「環境」教育の指導事例

1．趣旨と教材化の視点

近年，「環境問題」が急速にクローズアップされるようになった。従来は公害が及ぼす環境破壊という形で，環境問題へのアプローチがなされてきたが，近年のそれは「環境と人間の調和的共存」が主たるテーマであり，自然・人文環境の正しい理解をまず第一に必要とするものである。

環境とは，身の回りに絶えず存在するものであり，最も近い存在である。また，日頃観察したり気に留めたりすることはほとんどない存在でもある。この結果，環境は最も遠い存在になりがちである。意識的に身の回りの環境を意識しない限り，環境問題は切実なものになり得ないと考えられる。教える側が身の回りの環境を認識することなく授業を行えば，教えられる側は知識を押し付けられているだけに過ぎないことになり，全く身の回りの環境を認識できなくしてしまう危険性を秘めているといえよう。従ってまず身の回りの環境に常に関心をもち，理解してゆこうという姿勢が重要になる。環境をよく認識しその内容を理解することから環境問題の教育は始まると考えられる。

しかし，地理という観点で環境問題を考える場合には個々の環境の内容理解だけではなく，「空間的相互作用」を追究していく必要がある。環境が空間的広がりをもって互いに影響し合っていることを認識できれば，環境相互の全地球的な広がりを理解することにつながり，より確実な空間認識への道筋をつけることになると考えられる。例えば，知識羅列式に陥りやすい地形や気候などの大単元では，空間的相互作用の観点を効果的に導入することが内容の理解のみならず全地球的規模での環境理解を促すことになる。また，空間的相互作用に着目することから，いわゆる「環境問題」といわれる森林破壊や土壌汚染，大気汚染，地球温暖化などが人文・自然現象の相互作用で生じたものであり，加えて地球的規模で広がっていることを容易に理解することができるであろう。このようにして「環境」と「環境問題」とが地理的手法である「空間的相互作用」の認識を介して1つに結び付けられると考えられる。「空間的相互作用」と環境理解教育はきわめて深い関係にあるといえよう。

新学習指導要領では特に地理Bで「自然環境の地域性」や「人間生活と環境」・「世界の環境問題」などといった環境教育に直接かかわる内容構成となっており，環境問題の教育に力点をおいている。従って環境問題の根本を十分に認識し，環境問題に空間的な差異の解明を導入してゆく必要性が生じる。幸いにも地理では視聴覚教材が有効に使用できるため，生徒達にとって理解のしにくい空間的相違の説明も容易に行えると考えられる。

そこで，最も身近な環境と考えられる諸地域の「自然地形」に焦点をあて，わが国の「自然地形」の理解を通じて環境問題の存在を認識し，内在する空間的相互作用を理解させることを考えた。また，具体的にはわが国に多く分布する「山地・火山」の2点に絞って授業を構成することを試みた。身の回りに多く存在する地形を通じて環境を理解し，またその空間的相互作用，さらには環境問題を理解させることは，環境教育の充実に必要な視点であるといえよう。

2．指導内容のねらい

環境は全世界に分布している事象である。従って，初めから全世界を対象に授業を進めていくことは生徒に無理な空間認識を押し付けることになりかねない。また，「山地・火山」は，日本人にとってはごく当たり前の自然環境である。このためミクロスケール→マクロスケール，マクロスケール→ミクロスケールを相互に繰り返す手法など，環境の空間的拡散と空間的相互作用の理解を促す方向付けが必要になると思われる。

このような点を踏まえ，指導内容のねらいを次の5点にまとめた。

ア　自然環境とは何かを把握させ，わが国のみな

らず世界中にはさまざまの自然地形が存在していることを正しく理解させる。

イ　山地・火山の事例として日本を取り上げ，日本の山地・火山が豊かな自然環境を構成しており，この環境を利用しながら日本人が生活してきたことを理解させる。

ウ　他の地域，特にヒマラヤ地方を例に挙げ，わが国同様に豊かな自然環境が存在し，この自然環境を住民達が利用しながら生活していることを認識させる。

エ　自然環境が破壊された事例を挙げ，わが国でもヒマラヤでも同様の災害や悪影響が発生していることを理解させる。

オ　環境が空間的広がりをもち，相互に関係し合っていることを認識し，環境は私達にとってかけがいのない財産であることを理解させる。

3．指導内容の構成（8時間）

ア　水陸分布と大地形（2時間）
- 各大陸の位置関係
- 各大陸の肢節度
- 安定陸塊
- 古期，新期造山帯

イ　内・外的営力と河食輪廻（1時間）
- 内的営力と大地形
- 外的営力と小地形
- 河食輪廻
- 侵食・運搬・堆積の作用と地形変化

ウ　山地と火山－貴重な財産－（本時）
- 山地や火山の分布
- わが国と山地・火山－共存してきた私達
- ヒマラヤと山地
- 自然破壊とその現状
- 環境保全の重要性

エ　平原・平野と大地（1時間）
- 準平原
- 構造平野
- 沖積大地と沖積平野

オ　海岸の地形（1時間）
- 海岸平野
- 沈水海岸
- 離水海岸

カ　特殊な営力による地形（2時間）
- 氷河地形
- 乾燥地形
- カルスト地形
- 珊瑚礁地形

4．指導展開例

1)．主題と本時のねらい

山地と火山－貴重な自然環境－

身近な自然環境である山地と火山を再認識させることによってわが国には豊かな自然環境が今なお残っていること，自然環境と私達が共存し多くの利益を得ていることを理解させる。また，ヒマラヤ地域の事例から，山地や山脈がわが国のみならず全世界の人間の貴重な財産となっていることを認識させる。さらに，環境破壊が私達に与える影響を把握することから環境が地球的な規模の広がりをもち，相互に関連し合っていることを理解させる。

2）学習指導過程

指導内容	指導と学習活動	指導上の留意点	教材・資料
（導　入） 自然環境の意味	・自然環境は私達の身近にいつも存在していることを理解する。	・ごく当たり前の存在だけに，絶えず回りの環境を意識して観察することの重要さを認識させる。 ・特に身近な地形の例を導入する。	・「函館」の地形図 ・スライド ・地図帳
自然地形の分布	・地球上の主な山地と火山の位置を確認する。	・作業を通じて地球的規模の分布を確認させる。	・白地図
（展開） わが国の山地と山脈－共存している私達－	・今日，日本人はこうした地形を生かし，豊かな生活を営んでいることを理解する。	・「こうした地形を日本人はどのように生かしているのだろうか？」 ・発問の答えを板書し，整理する。 ・観光資源や鉱産資源として利用されている事例を提示し，理解させる。	・地図帳 ・資料1 ・スライド
ヒマラヤ山脈と人々	・世界で最も高い山地であるヒマラヤ山脈も住んでいる人々にとってはかけがえのない財産であることを理解する。	・「ヒマラヤ山脈で人間はどのように環境を生かしているのだろうか？」 ・発問の答えを板書し，整理する。 ・美しい風景は観光資源に利用され豊かな水資源は下流部の生活の糧になっていることを理解させる。	・資料2 ・スチール写真
環境破壊とその実情	・森林破壊を実例とし，環境破壊が私達の生活に及ぼす影響を理解する。 ・森林破壊が世界中で進行していることを理解する。	・ヒマラヤ山脈とわが国の例を挙げる。(洪水，土壌流出，海岸線消滅) ・作業学習を通じて把握させる。	・資料3 ・プリント ・スチール写真 ・地図帳
（まとめ） 環境保全の重要性	・身近な環境から世界の環境を理解し，こうした環境を守ってゆくことの重要性を認識させる。	・環境が空間的に大きな広がりを持っていることを理解させる。 ・環境問題も世界的に拡大していることを確認させる。	

（奥平，1992より）

5．評価の観点

ア　身近な環境の存在を再認識し，環境理解の基礎を修得できたか。

イ　わが国とヒマラヤ山脈の事例から人間が環境を生かして生活していることを理解できたか。

ウ　環境問題（森林破壊）が地球的規模で拡大していることを実感できたか。

エ　環境保全の重要性を理解できたか。

オ　授業で使用したスライドや資料，地図などの作成は適切であったか。

6．今後の課題

今回の指導事例は「山地・火山」を通じた環境理解について作成したが，より深い環境理解のためにはおもな自然地形に関しての内容や世界での分布をあらかじめ生徒がよく理解しておく必要があると考えられる。また，やや「薄く広く」生徒に環境理解を求める事例としたのは，自然地形にはより多くの題材があり，工夫次第でより効果的な環境理解教育を進められると考えたためである。さらに，この単元ではより効果的な視聴覚教材の作成を通じて「視覚に訴える」授業展開が可能になると考えられる。

Ⅳ．むすび

本稿では，「国際理解」教育と「環境」教育の2点について，指導事例作成の過程を事例として指導上の問題点に関する考察を行ってきた。授業を通じて生徒から得られた反応を含めて，獲られた結果は以下にまとめられる。

1）空間的相互作用の観点を導入することにより，少なくとも「国際理解」・「環境」教育に関してはより深い理解を得られることが明らかである。

2）「空間的な広がり」をより深めた形で理解させるためには，地図への興味付けを十分に行った上で事前学習を行うことが必要であると考えられる。

3）生徒の空間認識をより高めるためには視聴覚教材の開発と効果的な利用方法の確立を図ることが必要であると考えられる。

本稿では，「空間的相互作用」概念の導入が，地理Bの限られた項目に関して効果的であることを解明できた。地理Bはこれからの科目であり，従来の事例研究の不足部分を補うものとして有効であったといえる。今後はこの研究によって得られた成果を，地理Bの他の項目のみならず地理Aに関しても検討し，一般化することが必要であると思われる。

参考文献

奥平　理（1991）：生活習慣・色文化を通じての異文化理解　－「地理B」での展開例－，「地理教材シリーズ」第8集，北海道高等学校地理教育研究会，26～31.

奥平　理（1992）：身近な地形からの環境理解　－地理B「自然環境の地域性」での山地と火山の学習を通して－，「地理教育シリーズ」第9集，北海道高等学校地理教育研究会，25～30.

渋澤文隆（1990）：新「地理A」の趣旨と方向性，「新『地理A』を創る」（「地理」35－6増刊），古今書院，4～18.

渋澤文隆（1990）：地理教育見直しの観点と課題，「新『地理B』を創る」（「地理」35－7増刊），古今書院，4～18.

文部省（1989）：「高等学校学習指導要領解説　地理歴史編」，162～251.